

野口英世の遺した絆
～エクアドル共和国と会津若松市・猪苗代町の交流～

2018年4月
公益財団法人野口英世記念会
学芸員 森田鉄平

2018年は日本とエクアドル共和国が日・エクアドル修好通商航海条約を締結し、外交関係を結んだ1918年から100年目の節目の年にあたります。また、この1918年は野口英世が黄熱病研究のため南米エクアドルに上陸し、研究を行った年でもあります。

この節目の年を記念して、日エクアドル外交関係樹立100周年実行委員会が組織され、日本・エクアドル両国において記念事業が行われています。



キト旧市街

本記念事業において、野口英世生誕の地である福島県耶麻郡猪苗代町や、野口英世が青春時代を過ごした福島県会津若松市、また私が勤める公益財団法人野口英世記念会が、野口英世を一つの切り口として協力し、交流を行いましたのでご紹介します。



エクアドルで撮影された肖像写真

野口英世とエクアドル共和国

現在の千円札の肖像画でおなじみの野口英世は、細菌学者として1918年にエクアドルに出張し、黄熱病研究を行いました。当時世界的な課題として挙げられた熱帯地域における黄熱病の流行を抑えるために、まだ見つかっていない病原体の解明が求められていました。

野口英世は所属したロックフェラー医学研究所の派遣により1918年7月にエクアドル共和国・グアヤキルに上陸しました。到着するとすぐに研究にとりかかり、9日目には病原体を見つけ、その病原体からワクチンを精製し、多くの人命を救いました。エクアドル共和国ではたいへんな賞賛を受け、このワクチンは中南米各国で大きな成果を上げました。しかし、野口のみつけた病原体は黄熱病のものではないのではないかという批判がおこり、野口はもうひとつの流行地アフリカで研究を行い、その最中に自身の研究していた黄熱病に感染し西アフリカアクラ(現在のガーナ共和国)で亡くなりました。エクアドルでの研究から10年後の1928年のことです。

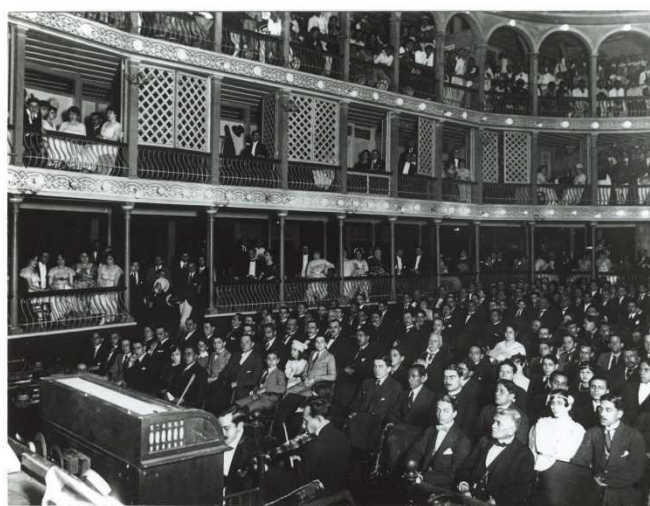
現在では野口がエクアドルで見つけた病原体はワイル病という症状の良く似た感染症の病原体であったと言われています。当時エクアドルではこのワイル病発症の認識がなく、黄

熱病と診断されていました。野口は黄熱病の病原体を見つけることはできませんでしたが、結果的には目の前で苦しむ多くの人々の命を救うこととなりました。その功績は野口の死後もエクアドルで讃えられています。

日本とエクアドル共和国での外交関係樹立の交渉に際して、この交渉にあたった石井菊次郎駐米大使はひと月半という短い期間の交渉で修好通商航海条約の締結が実現した背景に、当時現地で研究を行っていた野口英世の恩義に報いる意味があったのだらうと述べています。両国の国交樹立に際して野口英世の存在が民間外交として影響したことも野口の功績の一つといえるかもしれません。



1918年にグアヤキルに上陸した
野口英世



エクアドルで行われた謝恩送別会

グアヤキル市立博物館での野口英世展

日本・エクアドル外交関係樹立 100 周年記念事業として、2018 年 2 月 2 日より 3 月 31 日までグアヤキル市ならびに在エクアドル日本大使館が共催、日エクアドル外交関係樹立 100 周年実行委員会らが協力して、グアヤキル市立博物館において野口英世記念展が開催されました。

展覧会では野口英世の生涯とエクアドルでの活躍を中心にその生涯がパネルで紹介され、エクアドルで発行された野口英世生誕 100 年を記念する切手や現地で読まれるスペイン語版の野口英世の伝記も展示され、野口英世とエクアドルの縁が紹介されました。

現地エクアドルで収集された資料としては、当時の新聞記事や雑誌が出展され、野口英世やロックフェラー財団の調査隊が活躍した姿が報道されていました。



野口英世展示会場



講演会の様子

展覧会開幕に際し、2月2日に開幕の記念式典が行われ、私が「野口英世とエクアドルの絆」と題した講演を行い、また、エクアドルのみなさんに日本文化を伝え肌で感じてもらえるよう、海外でも多くの公演を行っている「和 league」による和太鼓と津軽三味線の演奏、獅子舞の演舞のステージが行われました。日本の伝統文化である和太鼓と津軽三味線に視覚的な演出を加え、まさに観客の五感を揺さぶる演奏で満席の会場からは割れんばかりの拍手と喝采が贈られました。

野口英世ゆかりの地、会津若松・猪苗代との交流

訪エクアドルに先立ち日エクアドル外交関係樹立100周年実行委員会事務局の高久照敏氏が会津若松市と猪苗代町を訪れ、室井照平会津若松市長と前後公猪苗代町長よりハメイ・ネボット・グアヤキル市長宛ての祝辞が託されました。

祝辞では外交関係樹立100周年と野口英世記念展に対するお祝いの言葉や、両国間ならびにエクアドルと両市町との末永い友好関係を祈念するメッセージが綴られました。この祝辞は開幕記念式典の席でグロリア・ガジャルド・グアヤキル市観光公社総裁に手渡されました。

記念展の中では野口英世を介して日本を紹介する展示として、野口英世青春の地・会津若松市にある末廣酒造株式会社の販売する「Dr.野口」という日本酒も展示され、日本文化の一つであるお酒の文化も解説付きで紹介されました。

開幕の日にはこの日本酒の振る舞いも行われる予定で準備が進められていました。しかし、2月4日に行われる国民投票のため、投票前にはお酒を飲むことや売ることが禁止となってしまう、残念ながらエクアドルの方に日本酒を楽しんでもらうことはできず、文化・制度の違いを感じる一面もありました。

また、今後の予定として100周年実行委員会と猪苗代町、猪苗代町観光協会の協力により、エクアドルの人たちに日本の花火を見てもらうイベントが計画されています。残念ながら花火をエクアドルに持っていき打ち上げることは困難なため、猪苗代町で行われる花火大会の映像を、エクアドルで放映することも計画され、エクアドル共和国とゆかりの地との交流が今後も継続されることが期待されます。



日本酒「Dr.野口」

野口英世が遺した絆

野口英世がエクアドル共和国を訪れて今年で100年となりますが、野口の死後、現在に至るまで、その絆は残されています。

野口英世の生誕100周年の1976年には、エクアドルに生誕100周年記念事業の実行委員会が組織され、キト市とグアヤキル市に胸像が設置され、盛大な除幕式と記念式典が行われました。また、生誕100年の記念切手も発行されるなど、野口英世の生誕100年をエクアドルの地でもお祝いしていただきました。

現在でもキト・グアヤキル両市に「Hideyo Noguchi」と名前のついている通りがあります。また、キトの郊外には「野口英世小学校」があり、授業の中で野口英世を学び、今でも親しみをもって来ています。



野口英世小学校



新たに設置される野口英世胸像

生誕100年に設置された胸像は、キト市のものは残念ながら盗難に遭ってしまいました。しかし、この外交関係樹立100年、野口英世上陸100年を機に、新たにキト市には胸像が設置されました。また、グアヤキル市ではエクアドル人美術家のトニー・バルセーカ氏により新たにもう一体、野口英世像が制作され、グアヤキル市の観光名所であり、野口英世が上陸した中央棧橋があったマレコン2000地区に設置される予定です。

今回の展覧会や100周年記念事業の行事に参加している人の多くが一般的なエクアドル市民でした。彼らが行事に参加し野口英世の事を知り、伝統芸能に触れ興味をもって楽しんでいる姿を見てたいへんうれしく感じました。

100年前に野口英世がエクアドルを訪れ、黄熱病研究を行ったことがきっかけとなり、それを忘れることなく現在まで続くこの絆は、野口英世という共通の認識によって結びついています。今後、両国の関係者が交流を行うことによって、そこで生まれた共通認識がきっかけとなり、また新たな絆が結ばれます。この絆が広くそして強く結びつくことで国際的な相互理解が形成されることが国際交流のもっとも大きな意義ではないかと感じました。今後もまずは野口英世を共通認識として持っている各国との交流に努め、そこから絆を広めていきたいと思っています。